

沢野井信夫の「あそび」を活かした美術教育の構想（1）

－ 沢野井信夫の構想の背景について －

宇田秀士

（奈良教育大学 美術教育講座（美術教育学））

Sawano's Practical Concept of Art Education Utilizing "Play"(1):
Background to the Concept of Nobuo Sawano

Hidheshi UDA

(Department of Fine Arts Education, Nara University of Education)

要旨：沢野井信夫（1916-1990）は、関西地方を中心に画家・デザイナー・編集者として活躍したが、「あそび」を冠した美術教育に関わる題材アイデア集も出版した。表現者としての活動のほか出版・編集を手がけた関係で、交友関係も広く、学校現場との交流も窺える。沢野井は学校現場の美術教育に直接関わったのではないが、一連の「あそび」著作は、自らの芸術体験をふまえた美術教育の構想と捉えることができる。本研究では、沢野井の美術教育構想の基盤や背景に関して、沢野井の辿った軌跡、発表作品、著作などをふまえ、実証的に考察した。その結果、赤松麟作、長谷川三郎への師事を経ての新文展・日展及び自由美術家協会展覧会への出品などの創作活動、児童書の表紙絵・挿絵制作、大阪大丸百貨店での出版やデザインの業務、それらを通じての人的交流が構想の基盤としてあり、第二次世界大戦後の民間美術教育運動がその背景としてあることを確認した。

キーワード：美術教育 art education
沢野井信夫 Nobuo Sawano
写実絵画 realistic painting
抽象絵画 abstract painting
あそび play

1. はじめに

筆者は、これまで美術教育における「遊び」概念の総括のため、第二次世界大戦後の関西地方を中心とした美術教育実践の展開を考察してきた¹⁾。そして、その関連文献・資料を探る中で、沢野井信夫の著作や活動を知ることとなった。

沢野井は、関西地方を中心に画家・デザイナー・編集者として活躍したが、「あそび」を冠した美術教育に関わる題材集も出版した。表現者としての活躍のほか出版・編集を手がけた関係で、交友関係も広く、教育現場との交流も垣間見える。沢野井は学校現場に直接関わったのではないが、一連の「あそび」著作は、自らの芸術体験をふまえた美術教育の構想と捉えることができる。

本研究では、沢野井の美術教育構想に関して、氏の辿った軌跡、発表著作や作品をふまえ、構想の基盤や背景について発表稿などの資料をふまえて実証的に考察する。

2. 略歴及び関連事項

沢野井の履歴の詳細は不明であるが、その著作である『新しい絵あそび』（1956年8月第1刷、1969年5月第7刷、1975年5月第11刷、1977年4月第12刷）²⁾、『詩と版画 特集号・澤野井信夫作品集』（1986）³⁾、『20世紀物故洋画家事典』（1997）⁴⁾、国立国会図書館典拠データ検索・提供サービス⁵⁾などをふまえたのが表1である。なお、沢野井は、その著作のプロフィールには、「赤松麟作、長谷川三郎に師事」と記すことが多く、赤松、長谷川を中心とした美術、文化的な事項の重要事項をくくりに付きで示した。また、国の教育政策及び美術教育の関連事項を[]付きで示した。

沢野井は、1916（大正5）年5月5日、滋賀県大津市に生まれた。1937年7月の盧溝橋事件に始まる日中戦争に加わり、戦傷者となり帰国している⁶⁾。

写実的な技法を赤松麟作（1878-1953）に学んだが、それは佐伯祐三（1898-1928）も「近輩にあたる研究所」であったと記している⁷⁾。赤松は、1878（明治11）年

に岡山県津山市に生まれ、1896年に東京美術学校西洋画科選科に入学し、さらに同校研究科に学び、研究科を退学し1900年に三重県第一中学校教員となった。1904年に大阪朝日新聞社に入社し紙上に挿絵執筆する傍ら、1908(明治41)年頃に大阪市梅田に赤松洋画塾を開き、1926(大正15)年に大阪市心斎橋筋の丹平ハウスに移転、赤松洋画研究所とした。佐伯の生没年⁸⁾をふまえると佐伯は梅田の洋画塾に学び、沢野井は心斎橋の洋画研究所で学んだと考えられる。

赤松は、1915(大正4)年に朝日新聞社を退社後、1927(昭和2)年に大阪市立工芸学校教員となった。さらに1936年に関西女子美術学校教授を経て1941年に関西女子美術学校校長となったのち、1945年に大阪市立美術研究所教授となっている⁹⁾。沢野井は、まず赤松の指導を受け、1943年に新文展に初入選した。1946年に春の日展、秋の日展に入選するなど通算して新文展・日展9回入選を果たした¹⁰⁾。

ここで、赤松を通じての交流の可能性も考えられることから、美術教育団体である大阪児童美術研究会についてふれる。赤松の活動は、関西地方を中心に影響力を持った大阪児童美術研究会の発会の基礎にもなった。1947(昭和22)年に大阪第一師範学校を卒業し、後に同研究会の主要メンバーとなる原晃一郎によれば、戦後混乱期のサークル活動時代のこの会について次のような回想がある¹¹⁾。

昭和21年当時に話を戻そう。とにかく我々は絵を描いた。高妻氏は、赤松麟作氏や石原正徳氏を紹介して下さい。/絵を描き、アルバイトに行き、焼跡の整地や沖仲仕等をしているうちに、赤松氏から油絵の批評を、石原氏からは児童画についての話を聞いたのである。

回想には、大阪第一師範学校教員の高妻こうづまみねお巳子雄(1905-1982)¹²⁾の交友関係から、関西洋画界の重鎮であった赤松や桜商会(現サクラクレパス)所属で後に大阪児童美術研究会研究所所長として美術教育振興に尽力した石原正徳(1902-1966)¹³⁾の名前があがっている。大阪という地理的に比較的狭い地域での活動であり、沢野井が出版に関わり、広い交友関係を持っていたことから同研究会の存在は沢野井の教育活動への関心の端緒となった可能性もあると言える。

沢野井が挙げる、もう一人の師長谷川三郎(1906-1957)は、1906(明治39)年に山口県で生れ、兵庫県甲南高校から東京帝国大学文学部美学美術史料に学び、1929(昭和4)年に卒業した。この間、1924年開設の大阪信濃橋洋画研究所に入り、小出楯重(1887-1931)に師事した。1929年から1932年にわたってアメリカ、イギリス、フランスなどに遊学した後、1937年、村井正誠(1905-1999)、浜口陽三(1909-2000)らと自由美術家協会を結成し、日本における抽象主義絵画の発展に尽力した。第二次大戦の戦中、戦後しばらく滋賀県

長浜に疎開していたが、1950年神奈川県藤沢市に移り、画業及び著作活動に従事するとともに、イサム・ノグチ(1904-1988)らと親交を結び、わが国の前衛美術の海外紹介につとめた¹⁴⁾。

沢野井は、1948年1月に大阪大丸百貨店で開催された創造美術協会第1回公募展に同会会員メンバーとして参加した¹⁵⁾。さらに、1948年の第12回自由美術展(自由美術家協会、10月4日-17日)に「ケース」、「骨董店」の2点を初出品した¹⁶⁾。これについては、長谷川が『アトリエ』(1949年2月)誌上にて出品者の中から沢野井を選び、その横顔を紹介している。長谷川は、沢野井について「大阪大丸百貨店出版部」に勤務し、「学歴は無いが読書家で立派なインテリ」と評した。また、赤松に学んだ技術を持って抽象絵画を開拓しようとしているとし、長谷川自身には真似できないものであるとしている¹⁷⁾。

沢野井は、まず写実絵画を赤松に学び、その後、関西地方出身で一時期、関西に拠点を置いていた長谷川に師事し、自由美術家協会への出品を行ったと考えられる。自由美術家協会には1948年に初出品し会員となったのち、1965年頃に退会している¹⁸⁾。沢野井は1957年の長谷川の死に際しては、「一モダンアート指導者の死」として『藝術新潮』5月号に追悼文を寄せた¹⁹⁾。

このほか1952年3月に刊行された『日本美術家連盟ニュース』25号の記事「関西支部「扶けあい運動」報告」の中に沢野井の名があり、この時点で日本美術家連盟に加入していたことがわかる²⁰⁾。同連盟は、1949年に個人加盟による美術家の全国組織として創立し、初代会長は安井曾太郎(1878-1955)であった。連盟の事業推進の連絡機関として近畿在住の美術家で組織する連盟関西支部を1950年2月に設立した(支部長 須田國太郎(1891-1961)、委員長小磯良平(1903-1988))²¹⁾。

続いて沢野井の本業の出版編集活動についてみる。1948年10月に里見勝蔵(1895-1981)『画魂』の刊行に携わったが、「里見の自序」には、大丸出版社が新設されて最初の企画が、里見の著作『画魂』と『セザンヌ』であったこと、それに尽力したのは「大丸」の沢野井であることが記されている²²⁾。先にみた長谷川の1949年の紹介とあわせ、「大丸」とは「大阪大丸百貨店出版部」と推測される。1956年8月には『新しい絵あそび』(第1刷)を刊行したが、奥付頁には「自由美術家協会に出品、現在同会会員。勤務先、大阪大丸文化課」と記されている。また、『デザインDESIGN』1966年12月号で論考を発表したが、同書では、沢野井を「大丸本部デザインセンター勤務」と紹介していた²³⁾。同書で沢野井は、大丸本部デザインセンターは創設5年目と記していることから同センターは1962年頃に創設されたと推定される²⁴⁾。

これらから、少なくとも1948年前後から1966年頃までは大阪大丸百貨店出版部(大丸出版社)、大阪大丸文化課、大丸デザインセンターに勤務していたと考えられる。

沢野井信夫の「あそび」を活かした美術教育の構想（1）

表 1

年	沢野井信夫の略歴及び関連事項 < >内は、美術、文化的な事項の重要事項。[]内は、国の教育政策及び美術教育の関連事項。
1916(大正5)年	5月5日 沢野井信夫 滋賀県大津市に生まれる。
1923年	< 4月 大阪市立工芸学校開校。 >
1924年	< 大阪市信濃橋近くに信濃橋洋画研究所開設。小出繪重、国枝金三・鍋井克之らが中心。1931年大阪市中之島に移り中之島洋画研究所と改称。1944年戦争激化に伴い閉鎖。 >
1926年	< 赤松麟作(1878-1953)、1908年頃に大阪市梅田に開設した洋画塾を1926(大正15)年大阪市中心斎橋に移転、赤松洋画研究所とする。 > < 山口正城(1903-1959)、大阪市立工芸学校教諭(工芸図案科担当)に赴任。1937年第1回自由美術家協会展に出品、1959年に難波田龍起、西田信一らとともに自由美術家協会を脱会し日本抽象作家協会を結成。 >
1932(昭和7)年	< 4月 保坂富士夫(1910-1987)〈画家 山本鼎(1882-1946)の従兄弟〉、アトリエ社勤務、1938年頃まで『アトリエ』の編集に携わる。1950年5月創元社に入社、沢野井の著作出版に関わる。 >
1936年	< 山口正城、赤松洋画研究所の階上に赤松デザイン研究所を開設し、大阪市立工芸学校の同僚山田外夫とともに指導にあたる。 >
1936-1939年	< 早川良雄(1917-2009)、1936年に大阪市立工芸学校工芸図案科を卒業、翌1937年に三越百貨店大阪支店の装飾部に勤務。山城隆一(1920-1997)、1938年に同校を卒業後、阪急百貨店宣伝部勤務。泉茂(1922-1995)、1939年に同校を卒業後、大丸百貨店に勤務。 >
1937年	< 2月 長谷川三郎(1906-1957)、浜口陽三、村井正誠らと自由美術家協会を結成。 >
1937年	< 新文展 開催(1943年まで、1944年は戦時特別展)。元は文展(文展：文部省美術展覧会 1907-1918)、帝展であり、第二次世界大戦後、日展(日本美術展覧会)に継承。 >
1940年	7月 盧溝橋事件 この事件に始まる日中戦争に沢野井が加わり、戦傷者となり帰還。 [8月 紀元2600年記念 全日本図画教育大会開催[奈良県 橿原]開催。]
1941年	[12月 日本、第二次世界大戦に参戦(太平洋戦争)。]
1943年 27歳頃	沢野井 新文展に初入選。
1945年	[8月 日本、ポツダム宣言受諾、第二次世界大戦(太平洋戦争)終結。]
1946年 30歳頃	沢野井 春の日展、秋の日展に入選。通算して新文展・日展9回入選。
1947年	[3月 教育基本法と学校教育法が公布。] [4月 大阪児童美術研究会 発会。初代会長 高妻巳子雄(1905-1982)] [5月 学習指導要領 図画工作編(試案)発行。学習指導要領一般編は3月に発行。]
1948年 31歳	1月 沢野井、創造美術協会 第1回公募展(於：大阪大丸百貨店)に同会会員メンバーとして参加。 [5月 J.C.F.シラー(1759-1805)、小栗孝則訳『人間の美的教育について』小石川書房(原著1795年)刊行。]
32歳	10月 沢野井、里見勝蔵(1895-1981)『画魂』大丸出版社 刊行に尽力。 < 日本美術家連盟 個人加盟による美術家の全国組織として創立。初代会長は安井曾太郎。連盟の事業推進の連絡機関として近畿在住の美術家で組織する連盟関西支部を1950年2月に設立。支部長 須田國太郎、委員長小磯良平 > 沢野井 第12回自由美術展(自由美術家協会、10月4日-17日)に「ケース」、「骨董店」の2点出品。
1949年	2月 長谷川三郎『アトリエ』誌上に第12回自由美術展出品者の中から沢野井を選び、その横顔を紹介。 [12月 西日本教育美術連盟が設立。初代理事長 高妻巳子雄。(大阪児童美術研究会 第1回大会が大阪学芸大学天王寺分校と同大学附属小学校で開催。これを機に同連盟が設立され、この大会を同連盟第1回大会と兼ねることとした。)]
1949-1950年	沢野井 発表論考に「自由美術協会員」と記す。
1951年	[4月 久保貞次郎(1909-1996)『児童美術』美術出版社、1951刊行。] [12月 小学校学習指導要領図画工作編(試案)改訂版発行。学習指導要領一般編は7月に発行。]
1952年	[1月 新しい画(え)の会 結成、多田信作(1932- ?)ら。その後 井手則雄(1916-1986)、箕田源二郎(1918-2000)らに加わり、1959年8月に新しい絵の会に再編。]
35歳	3月 沢野井 この時点で日本美術家連盟に加入済み。 [4月 サンフランシスコ講話条約発効による日本の独立。] [J・デューイ(1859-1952)『経験としての芸術』春秋社、1952(原著1934)刊行。] [5月 創造美育協会 発会。久保貞次郎、北川民次(1894-1989)ら。]

年	沢野井信夫の略歴及び関連事項
	< >内は、美術、文化的な事項の重要事項。[]内は、国の教育政策及び美術教育の関連事項。
1952年	[12月 北川民次(1894-1989)『絵を描く子どもたち—メキシコの思い出(岩波新書)』岩波書店、1952刊行。]
1953年	[H.リード(1893-1968)『芸術による教育』美術出版社、1953(原著1943)刊行。] [乾 一雄(1920-1992) 大阪学芸大学(現大阪教育大学)附属天王寺小学校教諭となる。1967年3月まで] [北川民次『子どもの絵と教育—親・教師・画家・心理学者との対談』創元社、1953刊行。]
1954年	[7月 具体美術協会結成 吉原治良(1905-1972)、白髪一雄(1924-2008)、嶋本昭三(1928-2013)ほか。1956年に「具体美術宣言」。
1955年	[6月 岡田清(1902-1975)『子供の絵の伸ばし方』創元社、1955刊行。] [造形教育センター発会。8月に第1回研究会。勝見勝(1909-1983)、松原郁二(1902-1977)、高橋正人(1912-2000)、熊本高工(1918-2008)ら]
1956年	[2月「絵を描く子どもたち」映画公開(監督 羽仁進)。久保貞次郎「絵を描く子どもたち」『美術手帖』105号、美術出版社 1956年3月号発表]
40歳	8月 沢野井『新しい絵あそび』(第1刷) 創元社、1956刊行。『新しい絵あそび—デザイン実習基礎併用』として1966年に改訂版。1956年版奥付頁には「自由美術家協会に出品、現在同会会員。勤務先、大阪大丸文化課」とある。
1957年	<12月 開高健(1930-1989)『裸の王様』(『文學界』12月号、文藝春秋社)発表。>
1958年	[学習指導要領 図画工作編の改訂。]
42歳	12月 沢野井『石にたずねる』創元社、1958刊行。
1960年	[V. ローエンフェルド(1903-1960)『児童美術と創造性』美術出版社、1960(原著1938、1939に英訳)刊行。]
44歳	12月 沢野井『版画のいろいろ』創元社、1960刊行。
1962年	1962年頃 大丸本部デザインセンター創設。
1963年	1月 沢野井発表稿の著者紹介には「大阪大丸デザイン・センター勤務。自由美術家協会会員」とある。
46歳	<11月 J. ホイジンガ(1872-1945)『ホモ・ルーデンス—人類文化と遊戯』中央公論社、1963(原著は1938)刊行。>
1965年	1965年頃 沢野井 自由美術家協会 退会。
49歳頃	[2月 乾 一雄「評論 遊びと労役と娯楽と その1」(『大阪児童美術』28号、1965)発表。「同評論 その5」(同誌32号、1968年1月)まで発表。]
1966年	12月 沢野井発表稿の著者紹介欄には「大丸本部デザインセンター勤務」と記される。
1967年	[4月 乾 一雄 大阪市教育委員会指導主事となる。]
1968年	1月 山川清、沢野井『カラーボックス 名画に見る裸婦の世界』保育社、1968刊行。 3月 沢野井『造形のおそび』創元社、1968刊行。奥付頁には「自由美術家協会々員、国際抽象派連盟員を経て」、「日本美術家連盟会員、総合デザイナー協会会員」とある。下記1975年刊行著作の記述とは齟齬がある。
	[7月 小学校学習指導要領 図画工作編の改訂告示、1971年4月施行。教科調査官 松本巖]
1969年	[4月 中学校学習指導要領 美術編の改訂告示、1972年4月施行。美術 教科調査官 小池喜雄]
1970年	<3月 大阪府で日本万国博覧会開催(会期9月まで)。>
	[10月 R. カイヨワ(1913-1978)『遊びと人間』岩波書店、1970(原著1958)刊行。]
1972年	[4月乾 一雄 大阪市立東淡路小学校長着任。]
1975年	7月 沢野井『新しい絵あそび』(第11刷)刊行(「むすび」執筆は1975年4月)。奥付頁には「自由展出品、会員を経て、国際抽象派連盟員、総合デザイナー協会会員。」とある。
1976年	[5月 乾 一雄ほか「子どもの造形性を育てる指導 テーマ1 線描の基本事項とその実践研究」(『教育美術』第37巻6号、教育美術振興会、1976)発表。「テーマ4 粘土による塊表現」(同誌第37巻10号)まで発表。]
1977年	[4月 乾 一雄 大阪市立大開小学校長着任。1978年4月-80年3月の2年間大阪市の指定を受け図画工作科研究。] [7月 小学校学習指導要領 図画工作編の改訂告示、1980年4月施行(教科調査官 樋口敏生)。「造形的な遊び(造形遊び)」が小学校低学年に導入。中学校学習指導要領 美術編の改訂告示、1981年4月施行(教科調査官新川昭一(1927-)。]
1980年	[3月 乾ら大阪市立大開小の2年間の成果を発表(『教育美術』1980年3月号)。]
1986年	8月 沢野井『詩と版画 特集号』詩と版画社、1986刊行(ABCギャラリーでの個展を機に特集)。略歴には、「自由美術協会会員、国際抽象派連盟、創造美術創立を経て、日本美術家連盟員、一科会創立委員。」とある。
1989年	[3月 小学校学習指導要領 図画工作編の改訂告示、1992年4月施行(教科調査官 西野範夫)。「造形遊び」が小学校中学年まで拡大。中学校学習指導要領 美術編の改訂告示、1993年4月施行(教科調査官 遠藤友麗(1943-)。]
1990(平成2)年	8月6日 沢野井 大阪にて死去。享年74歳。

50歳代以降の「あそび」関連著作における勤務先の記述はなく、所属協会のみ記されている。1968年3月刊行『造形のあそび』奥付頁には「国際抽象派連盟員を経て、日本美術家連盟会員、総合デザイナー協会会員」とある。1975年7月刊行『新しい絵あそび』（第11刷）奥付頁には「国際抽象派連盟員、総合デザイナー協会会員」とあり、上記記述と齟齬がある。晩年の1986年8月刊行『詩と版画 特集号』の略歴では、「自由美術協会会員、国際抽象派連盟、創造美術創立を経て、日本美術家連盟員、一科会創立委員。」となっている²⁵⁾。

1989（平成元）年9月刊行書に創元社（大阪市）で沢野井著作の編集を担当した保坂富士夫（1910-1987）の追悼文²⁶⁾を寄稿し、翌1990（平成2）年8月6日に大阪にて74歳で亡くなっている。『新しい絵あそび』『版画的いろいろ』『造形のあそび』など美術教育関連著作は、創元社から40歳から51歳までの10年余りの間に刊行されている。

3. 著作、編集著作、関連著作、所蔵作品

3.1. 著作、編集著作、関連著作

国立国会図書館サーチ、CiNii 学術情報ナビゲータ、J-STAGE、武者小路実篤記念館収蔵品データベース²⁷⁾などをふまえると、表1や註に示した他に以下のような著作、編集著作、沢野井紹介著作がある。勤務先の大丸出版社からの出版物の企画・編集・装幀、児童関係書の表紙絵・挿絵、美術専門雑誌への寄稿、句集への作品提供などである。

1940年代

・1947年10月-1948年5月 編集人 沢野井『ら・ふあむ・女性文化誌』2号、3号、大丸印刷（大丸出版印刷）/・1948年 沢野井『透明少年—ピストル消える町』あやめ書房（児童書）/・1948年12月 ゲーテ、渡邊格司訳『キルヘルム・マイスターの演劇的使命』大丸出版（装幀 沢野井）/・1949年 武田幸一著、沢野井 絵『二年生の童話 まほうのみせ』昭和出版（児童書）/・1949年10月 沢野井「近代様式化・秋の美術展から」『生活科学』2(10-11)、pp.15-18. ほか

1950年代

・1955年 河村良子著、沢野井ら 絵『大阪の昔ばなしと童話集』（児童書）創元社 /・1956年 大西重孝・吉永孝雄 編解説、三村幸一 写真、沢野井 装釘『文楽 文楽フォト・シリーズ1』文楽座出版部（大阪市）/・1956年 俳句 山口誓子、エッチング 沢野井・泉茂『壁画：句画集』壁画刊行会 /・1957年5月 沢野井「サロン・ド・ノメー—古酒（えと文）」開高健編集『洋酒天国』13、洋酒天国社、pp.45-46./・1957年 落合聰三郎、内山嘉吉著、沢野井 画『児童演劇』第3号（5・6月合併号）、日本児童劇作家協会 /・1957年 沢野井 画『児童演劇』第6号（9月号）、日本児童劇作家協会 /・1957年 阿貴良一 編、岩佐氏寿、北村学著、沢野井 画『児童演劇・特集 演劇教育白書』第8号（11月号）、日本児童劇作家協会 ほか

1960年代

・1964年6月 沢野井「〈私の好きな石〉<9>・石のとりこ」『日本美術工芸』通巻309号、日本美術工芸社、pp.34～35. ほか
1970年代

・1977年 楠本憲吉 句、沢野井 え、野の会・二科編『床花トコバナ』限定版、詩通信社 /・1979年 池内はじめ著、沢野井 カット『温石・大連の落日』大湊書房 ほか

1980年代

・1986年 楠本憲吉 句、沢野井 絵『画俳同源 印刷色紙10枚』

・刊行年不明 広瀬道子 詩、沢野井 え『日吉台幻想』

第二次世界大戦後の復興期から、沢野井は多くの児童書を手がけていた。さらに久保貞次郎（1909-1996）や北川民次（1894-1989）らの民間美術教育運動にふれる中で、子ども向けの『新しい絵あそび』（1956年8月、創元社）の着想に至ったのではないかと推測される。『新しい絵あそび』刊行直前の2月には羽仁進監督による映画「絵を描く子どもたち」も公開されていた。

1953年から1956年にかけては、創元社²⁸⁾から北川や岡田清（1902-1975）が、美術教育著作を刊行している。創元社からの出版は、表1に示した著作のほか、京都市保育会 研究、岡田編『幼児の絵・その心理と導き方』1955年、岡田『絵日記のかき方』1956年、大西金次郎（1904-1987）『粘土彫塑の導き方』1956年などがある。

3.2. 所蔵作品、アーカイブ作品

沢野井は、画家、デザイナーであり、上記の著作の装幀や挿絵、表紙も作品と言えるが、以下の版画作品が美術館所蔵作品、アーカイブなどで確認できる。

<大阪・国立国際美術館所蔵作品>²⁹⁾

・1955年 詩 小野十三郎、エッチング 泉茂 沢野井、装幀 早川良雄『詩画集 大阪』

（『美術手帖』Vol.7 No.94（1955年5月号）に紹介記事。同作品は、大阪中之島美術館コレクション 所蔵作品³⁰⁾でもある。）

・1955年 沢野井「貨物列車」エッチング、アクアチント、紙

・1955年 沢野井「妖精の翅」エッチング、アクアチント、紙

・1955年 沢野井「大怪魚」アクアチント、紙

<慶應義塾大学アートセンター/アーカイブ>³¹⁾

・1956年 タケミヤ画廊「No.2 銅版画展 1956.1.4-10」（アーカイブ no.01.162）瑛九、浜口陽三、泉茂、加納光於、加藤正、駒井哲郎、南桂子、沢野井、関野準一郎、上野省策、〔野中ユリ〕

沢野井は、1960（昭和35）年に『新しい絵あそび』に続き、子ども向けに『版画的いろいろ - 版画あそび』を著した。沢野井自身の作品のほか、国内外の作家の版画作品写真と子どもの作品写真を組み合わせる形で掲載し、木版、銅版画、石版画、版遊びなどを紹介した。序は、当時、春陽会会員の前田藤四郎（1904-1990）が書き、むすびで沢野井は、泉茂（1922-1995）には銅版画を、吉原英雄（1931-2007）には石版画を、前田には木版画

の技法について、それぞれ学んだことを記した。

泉茂は、表1に示したように山口正城（1903-1959）が教鞭をとった大阪市立工芸学校図案科を1939（昭和14）年に卒業し、大丸百貨店宣伝部装飾課に勤務した。大丸百貨店に勤務のかたわら中之島洋画研究所に学び、戦後、制作に専心するようになった。泉は、瑛九（1911-1960）と久保貞次郎の勧めがあって、1953年に銅版画を始めた³²⁾。またたく間に泉は銅版画の技術を身につけていくが、沢野井は、この泉から学び、上記の『詩画集 大阪』（1955年）に掲載のエッチングに結実させていく。ちなみに装幀の早川良雄（1917-2009）も、泉と同じ大阪市立工芸学校の出身で三越百貨店大阪支店の装飾部勤務である。勤務先の大丸百貨店の交友関係も活かし、活動をしていたことが窺われる。

4. 『新しい絵あそび』について

4.1. 出版の経緯と概要

沢野井は、1956（昭和31）年に子ども向けに楽しんで絵を描かせる工夫をし、題材アイデア集のような形式で、『新しい絵あそび・造形ノート』を著した。同書は、創元社より1956年8月に第1刷が刊行されているが、その「むすび（136頁、1956年7月記）」によれば、沢野井が療養所入院中に構想し、療養所の中で試行した内容を全快祝いの席で披露したのが契機だという。

その席に同席した朝日新聞大阪本社学芸部 村松寛（1912-1988、美術評論家で後に大阪芸術大学名誉教授）³³⁾の世話により、その内容を朝日新聞「日曜子ども欄」に15回発表し、その後、小学生毎日新聞に「色あそび」で35回発表し、同書は、これらに未発表内容を加えて刊行したという。また、同書の序をかいた宮武辰夫（1892-1960）、久保貞次郎の両氏は、第二次世界大戦後の民間美術教育運動に関わっていた。

この書は、その後に刷を重ね、確認できただけでも1977年4月刊行の第12刷までである。「むすび」の部分が第1刷から10年後の1966年5月にあらためて書かれた刷が出るが、この「むすび」の改訂と連動して、1966年刊行版以降、副題が「デザイン実習基礎併用」へと変更されている。1969年5月刊行第7刷の「むすび」は1966年5月に書かれており、謝辞には、宮武辰夫（故人）、久保貞次郎、村松寛（朝日新聞社）、保坂富士夫（創元社）の名が記されている。

このうち、保坂富士夫（1910-1987）は、大正期の自由画教育運動を主導した画家・版画家の山本鼎（1882-1946）の従兄弟にあたる。1932（昭和7）年4月にアトリエ社に勤務し、1938年頃まで『アトリエ』の編集に携わった後、1950年5月に創元社に入社し、沢野井の著作出版にも関わった³⁴⁾。

1969年5月版では、「本の中の絵」（135頁）の文章も少し変わった。さらに、最初の刊行から約20年後の

1975年4月に書かれた改訂版「むすび」のある第11刷が1975年5月に刊行された。その「むすび」は、1966年刊行版と比べ日付などの最低限の修正にとどまっている。ただし、この第11刷では従来版にあった135頁の「本の中の絵」が「ホモ・ルーデンス」へと差し代わっている。これは、1963年のホイジンガ『ホモ・ルーデンスー人類文化と遊戯』邦訳刊行（原著は1938）、1970年のカイヨワ『遊びと人間』邦訳刊行（原著1958年）の影響もあったのではないかと推測される。

このほか、第1刷目次（3頁）に「写真 田中幸太郎、写真 河村武英、写真 著者」とあり、96頁から97頁の間にノンブルが付されていないモノクロ写真頁がある。<「ねんどのうえに絵をかきましょう」大阪学芸大学附属小学校で> グループ 写真 田中幸太郎>、<ぼくらの、わたしらの美術館（大阪・生魂小学校）>、<上・三角、円、四角をかいてボール投げ 下・じぶんのすきな絵をかいて>、<よって、たかって <手がだるいよ> 土のおだんごがおもくなってきた>のキャプションがそれぞれ付いた4頁である。

1969年5月第7刷では、この写真4頁は、そのままであるが、目次付記（p.3）で河村武英の名が消え、「写真 田中幸太郎、写真 著者」となった。1975年5月版では、写真頁自体がなくなり、続く1977年7月第12刷でも写真頁はなく、目次（p.3）にも写真撮影者の付記がない。

沢野井の回想によれば、『新しい絵あそび』刊行後にはテレビ出演、講演に及んだという³⁵⁾。

4.2. 内容構成

目次には、<内容と関連させた4頁のカラー口絵>、<宮武と久保の序>を除く111の項目が示されている。このうち、1頁目は、「この絵あそびノートは」と題し、著作の趣旨が述べられている。また36-37頁は、奈良市油坂小学校の子ども作品など「身体障害者児童作品展」を紹介した。さらに131-134頁は「遊びと生活」として、子どもたちの作品を紹介しながら、それまでに上げなかった「絵あそび」として、紙芝居、絵巻物などを記した。

これらを除いた「2頁 四角を二つに」から「130頁 マッチ箱づくり」までが実質的な「題材」となっている。「2頁 四角を二つに」から通し番号をつけると下に示すNo.1-No.105の105項目となったが、一つの「題材」項目の中に複数の題材の活動が含まれているものもある。

本稿では、沢野井の構想の基盤や背景を知るために、その「題材」を類別して示すこととする。「題材」は、複数の内容が含まれているものもあり、厳密な整理にはならないが、おおよその傾向は示せると考えた。ただし、誌面の都合上、その概要を記すにとどめ、詳細は別稿で述べる。

（1）形を構成する活動

No. 1（2・3頁）、No. 2（4・5頁）、No.12（16頁）、No.28（44-47頁）、No.73（98頁）、No.80（105頁）など。

No. 1「四角を二つに」は、四角形を任意に二つに切り分け、複数のそれを組み合わせる活動であり、それを食パンや落ち葉に応用させた。No.73「布のはり絵」は、端切れを切り取って板の上におき、組み合わせがきれいと思ったとき糊で貼り付ける活動。No.80「レリーフ」は、厚紙に好きな形を描いた上で切り抜き、板の上で組み合わせ糊で貼り付けたり、切り抜いた形に支えを作って立て彫刻にする活動。イサム・ノグチ（1904-1988）「彫刻のためのエスキース」画像を挿入した。

（2）形を構成し、描く活動

No.16（20頁）、No.24（39頁）、No.37（57頁）、No.51（71頁）、No.56（76頁）、No.79（104頁）など。

No.16「まるの遊び」は、円で模様や形を描く活動。口絵にあるソニア・ドローネ（Sonia Delaunay 1885-1979）作品と関連付けた。No.24「使う絵」は、円、四角、三角などを構成して描く活動であり、レオン・ポーク・スミス（Leon Polk Smith 1906-1996）の幾何学的な抽象作品画像を挿入した。No.79「四角の輪」は、小さな四角形（や三角形、円）を順に大きな四角形（や三角形、円）で囲み模様にして描く活動。これも上記ドローネの口絵作品と関連付けており、姫路城壁画像も挿入した。

（3）直線や曲線を描いて模様や絵にする活動

No. 4（8頁）、No. 5（9頁）、No. 8（12頁）、No.68（93頁）、No.90（115頁）、No.92（117頁）など。

No. 4「一壘へ二壘へ三壘へ」は、紙の上で野球のボールを投げた後の軌跡を描き模様とする活動。ジャン・ルピアン（Jean Leppien 1910-1991）の口絵作品と関連させ、フェルナンド・レジェ（Fernand Léger 1881-1955）風の作品画像も挿入した。No.68「旗」は、直線を引いて国旗を作る活動。これも、ルピアン口絵作品と関連させた。No.90「三本の線と点と」は、鉛筆やクレヨン3、4本をゴムで括り付けて描く活動である。

（4）みる活動や作品などの紹介（鑑賞）

No.10（14頁）、No.21（34頁）、No.35（54-55頁）、No.46（66頁）、No.58（78-81頁）、No.83（108頁）など。

No.21「同じ形の模様」は、線でできた模様（バルコニーの垣、エルヒティオンという古城の内陣壁装飾）、円や三角を切り抜いたセルロイドの物差しを紹介し、鑑賞する活動。No.58「モザイク」は、ポール・シニャック（Paul Signac 1863-1935）の点描作品、お風呂のタイル、敷石などでモザイク、ヨーロッパの古い教会のモザイク画、クレール「ダイアナ」を紹介し、鑑賞する活動。またモザイクの材料として卵の殻、貝殻、マッチ棒、砂、小石を紹介し、方眼紙や碁盤でのモザイク画の活動を導入した。No.83「ポスター、そうてい」は、山城隆一（1920-1997）「sunkist」ポスター、早川良雄（1917-2009）『壁画』の装幀を紹介し、鑑賞する活動である。

（5）認知機能を活性化するゲーム的な活動

No. 9（13頁）、No.41（61頁）、No.62（86-87頁）、No.64（89頁）、No.78（103頁）、No.97（122頁）など。

No. 9「記憶テスト」は、○、▽、□などを任意に並べ、その一部を隠し記憶力を試す活動。No.41「色あそび」は、交差点の信号機と同じように色ごとの約束事を決めておき、色のカードが出たらその約束の動きをする活動。No.64「ボールはどこへ」は、伝言ゲームのような形で、簡単な絵を見せ写し、それをリレーしていく活動や紙を三つ折りし、波、三角、円形をそこに描いてレビューガールのようにする活動である。

（6）偶然性を活かした活動

No.15（19頁）、No.23（38頁）、No.25（40-41頁）、No.29（48頁）、No.33（52頁）、No.102（127頁）など。

No.15「いたずらゴッコ」は口絵作品と関連付け、色のついた糊でフィンガーペインティングする活動。No.25「運動する絵」は、吹き流しする活動。アンリ・ミシヨール（Henri Michaux 1899-1984）作品、顕微鏡、岸壁に描かれた絵などの画像を挿入した。No.33「しわの絵」は、紙を丸めてのぼすと皺ができて、それを鉛筆でなぞったり、色を作る活動。着物の絞り染めと同じやり方であることも紹介した。

（7）写実的な表現につながる活動

No.17（21頁）、No.26（42頁）、No.27（43頁）、No.30（49頁）No.50（70頁）など。

No.17「球」は、球の陰影を描く活動や描いた球を遠ざけてみる活動など。No.26「卵と角砂糖の話」は、卵や角砂糖のような色がなく単純な形態ほど写生は難しいということをアンリ・マチス（Henri Matisse 1869-1954）、モーリス・ド・ブラマンク（Maurice de Vlaminck 1876-1958）のエピソードをふまえて紹介した。No.27「絵になる材料」は、No.26を受けて写生のモチーフとして、お手玉、ボール、石、くるみ、貝、風船を紹介した。

（8）版を使った活動

No.18（22-31頁）、No.19（32頁）、No.20（33頁）など。

No.18「版画」は、紙版、擦り出し、拓本、切紙版画、霧吹き版画、虫めがねで太陽光を集め焦がした版画、イモ版、木版などの活動。マックス・エルンスト（Max Ernst 1891 - 1976）のフロッタージュ作品、パブロ・ピカソ（Pablo Picasso 1881 - 1973）のリトグラフ、パウル・クレー（Paul Klee 1879 - 1940）の引き掻き絵、エッチング、版画に関わる文化（14世紀のヨーロッパの木彫レリーフ、中国の剪紙、イースター島の石像レリーフ）、子どもの版画作品（大阪山滝小学校）、謄写版版画、ガラス板版画などを紹介。No.19「写真機のいない写真機」、No.20「政子ちゃんの工夫」は、印画紙版木の活動。マン・レイ（Man Ray 1890-1976）作品画像を紹介した。

（9）立体的な造形作品をつくる活動

No.22（35頁）、No.34（53頁）、No.45（65頁）、

No.65 (90 頁)、No.67 (92 頁)、No.69 (94 頁) など。

No.22「モビール」は、動く造形作品をつくる活動。アレクサンダー・カルダー (Alexander Calder 1898 - 1976) の作品画像を挿入した。No.34「おもちゃをこうあんする」は、草の輪、豆(ドングリ)細工といった身近な材料で作るおもちゃをつくる活動。No.67「くらしの工夫」は、紙を半分に折り、切れ目を入れて開き、ランプシェードにする活動、本の外函を切って状差しを作る活動、端切れを使ったパッチワークの活動などである。沢野井の勤務先の大丸百貨店の「水曜クラブ(婦人の集い)」造形グループの口絵作品を挿入した。

(10) 材料を工夫した活動

No.31 (50 頁)、No.40 (60 頁)、No.57 (77 頁)、No.59 (82 頁)、No.99 (124 頁)、No.100 (125 頁) など。

No.31「誰だ、いたずら者は」は、色セロハンのボールを作り、広げて光を当てる活動や試験官に色水を入れて光を当てたり、風で揺らしたりする活動。No.40「ろうそくの絵」は、蠟燭やクレヨンで描いた後、水彩絵具で塗ったり、白いクレヨンで描いた絵に墨を塗って浮き上がらせる活動。No.100「フィルムに」は、不要となったフィルムを湯で洗い透明のセルロイドにしてマジック・インキでかき、幻燈機に映す活動である。

4.3. 内容構成からみる傾向

先述のように、一つの題材に幾つかの活動が記されていたり、複数の類別にまたがる活動もあり、厳密な整理、類別にはなっていない。内容のおおよその傾向をみる。

「(1) 形を構成する活動」「(2) 形を構成し、描く活動」「(3) 直線や曲線を描いて模様や絵にする活動」は、いわゆる抽象絵画や模様に関わる内容と言える。沢野井自身が装幀した同書のブックカバー(カラー)もこの範疇に入り、この書の主要な内容となっている。長谷川三郎への師事や自由美術展への出品、大丸百貨店での出版やデザインの業務がその基盤にあると推測される。また、上記に比べ量的には少ないが、「(7) 写実的な表現につながる活動」もあり、これも赤松麟作への師事や新文展・日展への出品が根底にあると考えられる。

また、「(4) みる活動や作品などの紹介(鑑賞)」「(6) 偶然性を活かした活動」「(8) 版を使った活動」では、美術作品、美術文化を多数紹介しており、幅広い研究の成果が窺われる。さらに泉茂、山城隆一、早川良雄など大丸百貨店での出版やデザインの業務を通じての人脈も活かしていると考えられる。

「(9) 立体的な造形作品をつくる活動」「(10) 材料を工夫した活動」では、「絵」の範疇をこえた内容も入っている。今日の図画工作科「造形遊び」に似て、子どもの興味・関心をふまえ、総合的な造形活動を意識したからなのかもしれない。

少し変わった所では、「(5) 認知機能を活性化するゲーム的な活動」もある。子どもの造形活動への意欲を高め

るために、色彩や形に関わる内容に関して個人及び集団でのゲーム的な要素を入れ込んだようである。

5. おわりに

沢野井信夫の著作や関連著作などから、その略歴を作成した。赤松麟作、長谷川三郎への師事を経ての新文展・日展及び自由美術家協会展覧会への出品などの創作活動、大阪大丸百貨店での出版やデザインの業務活動、児童書の表紙絵・挿絵制作、これらから得られたと考えられる人脈を確認した。

1956年に刊行した子ども向けの『新しい絵あそび』は、その内容構成からみて、上記の沢野井の軌跡が基盤としてあることが窺われる。抽象絵画やデザイン作品、美術文化などが多数紹介され、題材に結びつけられている。

沢野井の構想の背景には、第二次世界大戦後の復興期1950年代に起こった民間美術教育運動の影響があると言える。『新しい絵あそび』の序を書いた宮武辰夫や久保貞次郎は、その主導者であり、刊行した創元社は、その運動の主要な出版を支えた。

次稿では、『新しい絵あそび』の構成内容の詳細をふまえた沢野井の構想の考察を行いたいと考えている。

謝辞

本稿執筆にあたり、研究にご協力いただき、貴重な情報や示唆をいただいた次の諸氏にお礼申し上げます。(敬称略)

青柳清孝(大阪 ギャラリーブチフォルム)、石野容子(元大阪大丸本店デザイン室)、乾 健一(茨城県近代美術館学芸員)、金子一夫(茨城大学名誉教授)、橋爪節也(大阪大学教授)、矢部敬一(創元社代表取締役社長)、山野英嗣(和歌山県立近代美術館長)

金子氏、橋爪氏、山野氏には、研究の方向性についての示唆をいただきました。

付記

本研究は、JSPS 科研費 JP20K02885 (2020-2021 年度 基盤研究(C)、図工・美術科題材と「包括的な学習」との関係性-美術教育における「遊び」概念から、代表宇田秀士)の助成を受けました。

注

- 1) 宇田秀士(2013), 「遊び」を活かした美術教育実践の構想(1)-乾一雄の美術教育の構想, 奈良教育大学 教育実践開発研究センター 研究紀要, 第22号(通巻35号), pp.35-43. 宇田(2013), 「遊び」を活かした美術教育実践の構想(2)-乾一雄の美

- 術教育の構想にみられる「遊び」の原理と教育実践－, 奈良教育大学紀要, 第 62 卷 (1), pp.105-120 など。
- 2) 沢野井信夫 (1956), 新しい絵あそび (第 1 刷), 創元社. 沢野井 (1969), 同書 (第 7 刷). 沢野井 (1975), 同書 (第 10 刷). 沢野井 (1977), 同書 (第 12 刷).
 - 3) 澤野井信夫 (1986), 詩と版画 特集号・澤野井信夫作品集, 詩と版画社.
 - 4) 岩瀬行雄, 油井一人編 (1997), 20 世紀物故洋画家事典, 美術年鑑社, p.143.
 - 5) 国立国会図書館典拠データ検索・提供サービス, <https://id.ndl.go.jp/auth/ndlna/00069222> < 2021 年 8 月 31 日アクセス >
 - 6) 「支那事変に、北支事変から加わり戦傷者となり帰還」と自ら記している。前掲註 3), p.41.
 - 7) 前掲註 3), p.29.
 - 8) 新宿区立 佐伯祐三アトリエ記念館 <https://www.regasu-shinjuku.or.jp/rekihaku/saeki/101241/> < 2021 年 8 月 31 日アクセス >
 - 9) 東京文化財研究所 Web サイト <https://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/8899.html> < 2021 年 8 月 31 日アクセス >
 - 10) 前掲註 3), p.2. 前掲註 4), p.143.
 - 11) 原晃一郎 (1997), 「2. 組織の変遷－初期を中心に」, 大阪児童美術研究会, 記念誌 50 年の歩み, 真生印刷, p.9.
 - 12) 高妻は, 1905 年 9 月 2 日に大阪市で生まれ, 1925 年に大阪府天王寺師範学校, 1929 年に東京美術学校図画師範科をそれぞれ卒業後, 大阪市真田山尋常高等小学校訓導, 大阪府立岸和田高等女学校教諭などを経て, 1934 年に大阪府天王寺師範学校教諭となる。西日本教育美術連盟理事長、大阪学芸大学附属天王寺小学校長を歴任の後、1971 年に大阪教育大学を定年退官。1982 年 8 月 4 日に死去。
大阪児童美術研究会 (1983), 敬慕 高妻巳子雄先生, 東洋紙業, pp.286 - 300.
 - 13) 石原は, 1902 年 1 月 24 日に福岡県嘉穂郡木浦岐で生まれ, 1928 年 5 月に株式会社桜商会 (現サクラクレパス) に入社。大阪児童美術研究会創立以来の会員であり、同会の研究所所長として美術教育の研究と振興活動に従事した。1966 年 1 月 29 日に死去。
大阪児童美術研究会 (1972), 「特集 石原正徳先生と美術教育」, 大阪児童美術, 40 号, pp.1-20.
 - 14) 東京文化財研究所 Web サイト <https://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/8921.html> < 2021 年 8 月 31 日アクセス >
 - 15) 創造美術協会 Web サイト創造美術協会小史 <http://sozobijutsu.com/history.html#zenshi> < 2021 年 8 月 31 日アクセス >
 - 16) 自由美術家協会 (1948), 第 12 回自由美術展目録 1948 年 10 月 4 日 -17 日 東京都美術館。
 - 17) 長谷川三郎 (1949), 「新人を語る 沢野井信夫」, アトリエ, 265 号 (2 月), アルス, pp.40-41.
 - 18) 『第 28 回自由美術展陳列目録 1964 年 10 月 12 日 - 30 日』には会員名簿にその名があるが, 出品者名簿にはない。『第 29 回同目録 1965 年 10 月 12 日 - 30 日』では, 会員名簿, 出品者名簿ともにない。
 - 19) 沢野井信夫 (1957), 「一モダンアート指導者の死」, 藝術新潮, 8 (5) 1957 年 5 月号, 新潮社, pp.276-278.
 - 20) 日本美術家連盟ニュース (1952), 25, p.2.
 - 21) 日本美術家連盟 Web サイト <http://www.jaa-iaa.or.jp/history/index.html> < 2021 年 8 月 31 日アクセス >
東京文化財研究所 Web サイト <https://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/9129.html> < 2021 年 8 月 31 日アクセス >
 - 22) 里見勝蔵 (1948), 画魂, 大丸出版社, p.4.
 - 23) 沢野井信夫 (1966), 「振子の球にたくして－デザインの伝統と創造《デザインをめぐる諸考察》」, デザイン DESIGN, NO.91, 1966 年 12 月号, 美術出版社, pp.20-23, p.61.
 - 24) 同上, p.21. また沢野井は次の随筆を発表したが, 発表論考の著者紹介では「大阪大丸デザイン・センター勤務。自由美術家協会会員」とある。沢野井信夫 (1963), 「表紙の作家・早川良雄のこと」『デザイン DESIGN』NO.42 (1 月号), 美術出版社, p.47, p.52.
 - 25) 前掲註 3), p. 2.
 - 26) 沢野井信夫 (1989), 「あざみの歌」, 保坂喜美編, 誇り高き哲人・追悼保坂富士夫, 創元社, pp.88-89.
 - 27) 国立国会図書館サーチ, CiNii 学術情報ナビゲータ, J-STAGE (国立研究開発法人科学技術振興機構 (JST) 運営電子ジャーナルプラットフォーム), 調布市 武者小路実篤記念館 収蔵品データベース http://203.181.93.123/detail.php?rec=10326&from=3500&keyword=&category=1&kind=&AD=&AD_option=0 < 2021 年 8 月 31 日アクセス >
 - 28) 創元社 (大阪市) には保坂富士夫の業務日誌が保管されているが, 『新しい絵あそび』は, 沢野井の持ち込み企画であることを窺わせる記述がある。
 - 29) 国立国際美術館 Web サイト <https://search.artmuseums.go.jp/records.php?sakuhin=53172> < 2021 年 8 月 31 日アクセス >
 - 30) 大阪中之島美術館コレクション 所蔵作品 http://jmapps.ne.jp/osytrmds/sakka_det.html?list_count=10&person_id=476 < 2021 年 8 月 31 日アクセス >

- 31) 慶應義塾大学アートセンター / アーカイブ <http://www.art-c.keio.ac.jp/old-website/a/listing/takb101.html> <2021年8月31日アクセス>
- 32) 和歌山県立近代美術館「泉茂 ハンサムな絵のつくりかた」https://www.momaw.jp/exhibit/2016_izumishigeru/
植野比佐見「泉茂 ハンサムな絵のつくりかた 講演記録 2017年3月4日」http://thethree.net/wp-content/uploads/2017/03/170304izumi_uenotalk.pdf <共に2021年8月31日アクセス>
- 33) 東京文化財研究所 Web サイト <https://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/10720.html> <2021年8月31日アクセス>
- 34) 前掲註26), pp.298-300.
- 35) 前掲註3), p.33. また同書p.32には、『新しい絵遊び』は「25版も重ねる」とあるが、これまで確認できたのは、12刷までである。